解説

山根 美奈

ウバハ・クリスティーナ・アリ・ファラフ（Ubax Cristina Ali Farah）は、ソマリア人の父とイタリア人の母のあいだに、一九七三年、イタリア北部の都市ヴェローナで生まれた。一九七六年、父の帰国に伴ってソマリアの首都モガディシュに移住し、一九九一年、政変によって出国するまでの十五年間を暮らした。本作は、そこでの思い出を綴ったエッセイとして、二〇〇七年、移民とディアスポラのための投稿サイト、エル・ジブリ（El-Ghibli）に投稿されたものである。

本文の冒頭で、ソマリアの代表的な作家であるヌールッディーン・ファーラフ（Nuuradiin Faarax）の一文を引用している。ここに、家族、時代、場所、それらすべて、まさに「何もかもまるごと」失ってしまった作者の大きな寂寥感を読み取ることが出来る。それは同時に、失くした者こそ別の新しい人、物、場所が見つけられるという実感を表したものだ。しかし、なぜ作者クリスティーナは、何もかも無くさざるを得なかったのか。その背景には、ソマリアの風土、社会、文化、政治、そのすべてが大きくかかわっていた。

ソマリアは、アフリカ東部のアデン湾とインド洋に面した「アフリカの角」と呼ばれる地域を占めており、国土の南部を赤道が通過している。北部は丘陵地と砂漠になっており、国民の七割が遊牧民であり、牛、羊、ヤギ、ラクダ等の家畜の頭数は人口（日本の外務省によれば二〇一五年、一四〇〇万人）より多いと言われている。残りの三割の国民は、南部の二つの河川（ジュバ川とシェベル川）の流域で農業を営んでいる。国民の九割がソマリ人であるが、むしろ、部族内の六つに分かれた氏族への帰属意識の方が高い。他のアフリカ諸国と同様に、一九六〇年に旧宗主国（北部はイギリス、南部はイタリア）より独立を果たし、ソマリア共和国となった。しかし、一九六九年のクーデターによってソマリア民主共和国へと移行する。

新たに大統領となったモハンメド・シアード・バッレは、科学的社会主義を掲げて社会主義国家を宣言した。これによって、地方行政は、旧来の氏族長と派遣された軍人の二重のものとなり、打ち出されてくる「新家族法」や「土地法」は、氏族主義の解消を目指したものとみられ、恐怖政治への導火線ともなった。こうした政策から、シアード・バッレはソマリ文化の体現者と言われる一方で、ソマリ文化の破壊者という評価もされた。

作者クリスティーナが両親に伴われて移住した当時、オガデン紛争が勃発していた。オガデン紛争は、隣国エチオピアで共産主義革命が起こり、同国東部のオガデン地方に居住するソマリア人と西ソマリ解放戦線を支援する名目で、ソマリアが軍隊を派遣して始まった紛争である。当初、社会主義国家となったソマリアを援助していたソ連が、エチオピアの共産化支援に切り替えたため、ソマリアは紛争から撤退したが、同時に、オガデン地方に居たソマリ人が大量に難民としてソマリア領内に流入することとなった。

クリスティーナの父は、帰国すると妻子を自身の姉、つまりクリスティーナが伯母と呼ぶ人に預けて長期の不在をしている。そして、クリスティーナは伯母一家と共に首都で比較的平穏な暮らしを送った。それはつまり、父が政府軍の一員として紛争地に赴いていたものと考えられる。しかし、父は突然に、裁判の権利も与えられず処刑された。本作には詳細は全く語られていないが、一党独裁を続けて来た強権的シアード・バッレ政権も、八〇年代後半になると、反政府活動が活発化し、身内から反旗を翻す者も現れている。そして九〇年五月、首都モガディシュに戒厳令が敷かれた。

クリスティーナが居住していた家に鉄扉が設

置され、治安が悪くなった。従姉のシュクリー（ソマリアでは女性の名である）がイタリアへと脱出していき、「それから家の中はがらりと変わった」、「解放軍を熱望した」と記している。そしてついにその日が来た。一九九一年一月二六日、大統領が首都を脱出し、クリスティーナは父母を亡くしたうえに伯母も従兄弟たちも、さらには、住み慣れた家さえも失い、単身イタリアへと向かったのである。十八歳だった。

現在、クリスティーナは、ブリュッセルに住む。ローマ第三大学で教鞭をとり、ソマリ文化を若者たちに伝える。YouTube では、詩を読み、発信し、表現するクリスティーナを見ることが出来る。また、二〇〇八年、ソマリア内戦勃発によって生き別れた従姉妹との再会を描いた小説『マードゥレ・ピッコラ（*Madre pissola*）』でイタリアの文学賞の一つエーリオ・ヴィットリーニ賞を受賞。二〇一四年、ソマリア人移民の青年を主人公にした小説『コマンダンテ・デル・フューウメ（*Comandante del fume*）』を上梓した。

あの日からおよそ三十年、たくさんのものを見つけたことだろう。

【参考文献】
・遠藤貢「第四章　ソマリアにおけるシアド・バーレ体制の再検討―その統治と遺制をめぐって―」、佐藤章編『統治者と国家―アフリカの個人支配再考―』日本貿易振興機構アジア経済研究所、二〇〇七年
・柴田久史『ソマリアで何が？』岩波ブックレット NO.302、岩波書店、一九九三年